

創られたヒツジ

— 中国・江南農耕地帯の在来ヒツジの品種改良にみる家畜観

菅 豊

中国の広大な国土は気候、風土の変移に富み、多くの植物相、動物相を保持している。中国の人は多種多様な自然環境のなか、早くより農耕を発展させ、また、さまざまな動物を人為的な管理のもとに改変する家畜技術を開発させてきた。本稿で取り扱う中国・江南地域でも、穀物や蔬菜、果樹などの耕種と家畜飼育とを、有機的に関連させた有畜農業をおこなってきた。そこは、歴史的にみてもいわゆる農耕（稲作）生産が卓越した農耕社会の地域であり、内モンゴルやチベット、新疆などの牧畜的世界や、華北の畑作地帯とは、経済的様相が大きく異なっている。

この地の家畜飼育は、雑食性の有蹄類（ブタ）、およびニワトリなどを中心とした「非牧畜的家畜」（梅棹 1976: 85）の飼育であり、農耕という生業と緊密に結合されている。そのため、農耕の論理が、その飼育形態の中に貫徹され、そのありようは明らかに牧畜社会とは異質なものとなっている。それは、牧畜社会に一般的にみられるよう

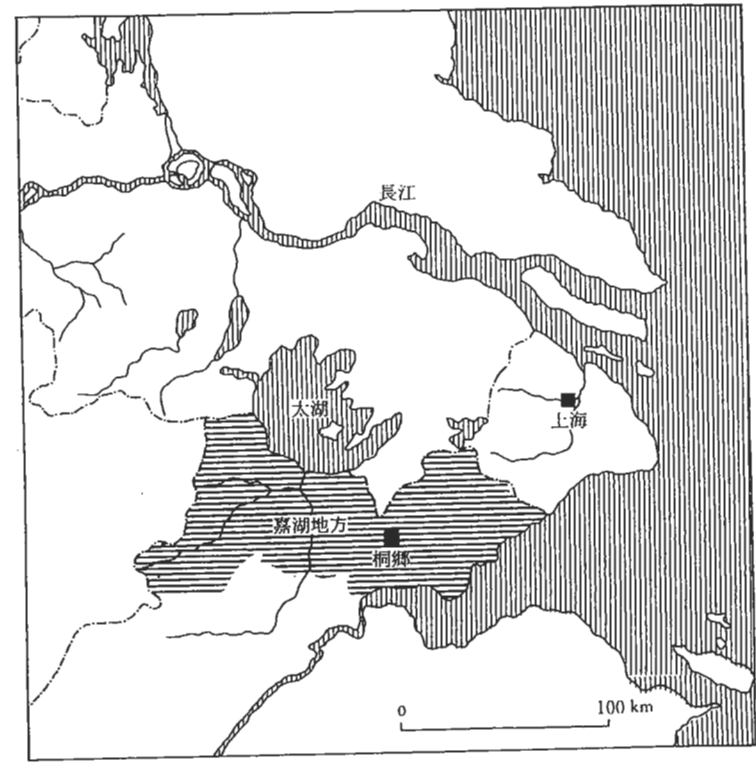


図 4-1 中国江南地域と嘉湖地方

な、対象動物の習性をうまく利用して「寄り添う」ようにして維持する家畜飼育形態ではなく、そのような習性を人間側が乗りこえて極端に改変し、「支配」して維持するイデオロギーに基づいた飼育形態であるといえる。

江南の一部、浙江省嘉湖地方（嘉興市、湖州市周辺地域）では、江南の他の地方に比べて「牧畜的家畜」であるヒツジが、特異的に集中して飼育されている。このヒツジは、湖羊（湖羊 [Hu Sheep]）と呼ばれ、世界的にも稀な品種特性を有した在来ヒツジである。また、飼育においても特徴的な技術、利用目的、繁殖形態をもっている。湖羊のこれらの特異性は、このヒツジのお

かれた江南地域の人びとの価値観によって付与された特性であり、長い年月を経て形成されたものである。

本稿では、本来ならばヒツジ飼育には適さない環境下にあつて、特異的な品種特性を生み出すために、数百年にわたって展開されてきた在来の特異的な飼育技術、繁殖形態について明らかにし、そのような一見して無理と思われるような行為が、商業的農業のイデオロギーによって動機づけられたものであることを検討する。

一 中国の家畜たち

1 中国のヒツジを取りまく環境

面積約九六〇万平方キロメートルにもぼる中国国土は、大きく東部季節風湿潤区、西北乾燥区、青蔵高寒区の三つの自然区域に分けられる。東部季節風湿潤区はモンスーンの影響で温暖湿潤であり植物栽培に適した区域で、農業地理学上「農区」として扱われ、一方後二者は乾燥しているため牧畜を主体に生活を営む「牧区」として扱われている（沈 [Shen]）。「農区」の領域は、中国の開発の歴史推移において北方、あるいは西方に拡大する傾向があるが、依然、国土の五二パーセントを「牧区」が占めている。

自然環境や生業形態、あるいは民族が異なる「農区」と「牧区」とでは、家畜飼養の方法・形態・経営方式などにおいて大きな相違が認められる。両者の遷移地帯には、農牧の混合もみられるが、基本的には「牧区」では、天然草地においてヒツジ、ウシ、ウマ、ラクダなどの大規模な放牧群を専門的に飼養する。「農区」では、飼料を

もとにブタ、ウシ、ヤギなどの舎飼いや、ニワトリやアヒルなどの家禽類の飼養を、農業のあいまに副業的にこなうのがその基本となっている。その点において、「農区」は「非牧畜的家畜」の飼養地帯と言い換えることができる。

中国の「非牧畜的家畜」は一九八〇年度の飼養頭数でみると、ブタ(全世界の生産頭数の約四〇パーセント)、家禽(全世界の生産羽数の約一三パーセント)ともに、世界第一位の生産数を誇り(沈1986)、中国は世界レベルでも「非牧畜的家畜」の卓越地帯であり、さらにその生産は中国でもその南東部の「農区」に集中している。

一方、「牧畜的家畜」の代表ともいえるヒツジは、ほとんど「牧区」に集中している。

その飼養地域は、北緯二八〜五〇度、東経七五〜一三五度の範囲にほぼ収まり、二六省の内二〇省に広がっているが、環境の変移に応じてその分布は偏在している。ヒツジは、その動物の特性として比較的乾燥した気候を好むため、高湿度の気候はその生活に向かない。そのため広大な中国の領域において、ヒツジは北部、西部の「牧区」で主要家畜として扱われているのである。

省区別に比較すると、最も飼育頭数が多いのは内モンゴル自治区で一七・八八パーセント、次いで新疆ウイグル自治区一六・八二パーセント、青海省一三・二七パーセント、チベット自治区一二・五三パーセント、甘肅省五・三四パーセントと、五大牧区において全中国の約三分の二のヒツジが飼育されている。

一方、浙江、江蘇、安徽、湖北、湖南、江西、福建、広東、広西、海南など、中国東南沿海部の一〇省区を合計しても、ヒツジの飼育頭数は中国全飼育頭数のわずか一・七パーセントにしか満たない。この極端な偏在は、温暖湿潤、あるいは亜熱帯、熱帯という気候条件が、ヒツジの繁殖、育成に不利であること(李志農1993:11-31)、さらにこれらの省区においてドミナントである農耕という生業が、牧畜とは土地利用に関して競合的であること

から説明できよう。

中国畜牧学会では、ヒツジの品種として五八種を確認している。その中で中国北部地域において飼育される蒙古羊(Mongolian Sheep)が、ヒツジ全飼育頭数の約四五パーセント、チベット・青海省などの高地で飼育される西藏羊(Tibetan Sheep)が約三三パーセント、新疆ウイグル自治区で多く飼育される哈萨克羊(Kazakh Sheep)が約一〇パーセントと、この三大綿羊だけで中国のヒツジの九割近くを占めることになる。

本稿で取り扱う湖羊は、中国浙江省太湖辺地域、特に嘉湖地方において飼育されている。その数はおよそ一七〇万頭で、蒙古羊や西藏羊に遙かに及ばないが、しかし、中国東南沿海部の一〇省区で飼育されているヒツジの飼育頭数が極端に少ないことから考えると、湖羊のもつ特異的な地位は顕著である。

中国のヒツジの大多数を占め、広い範囲に分布する蒙古羊、西藏羊、哈萨克羊は、羊毛、羊乳、羊肉が利用される兼用種である。数十頭から数百頭を単位とする大規模な遊牧、放牧形態で飼育され、その生産地には、かつて、家畜の人類学的研究で注目されてきた「牧畜的家畜」の世界が広がっていた。

例えば、中国北部内モンゴル自治区シリンゴル盟東、西ウジムチン旗では海拔八〇〇〜一二〇〇メートル、年平均気温〇〜一・四度(一月平均気温マイナス二度、七月平均気温二〇度)、年降水量二五〇〜三〇〇ミリという自然環境のもと、モンゴルヒツジ系の地方品種・烏珠穆沁羊(Ujina Sheep)をウマ、ウシ、ヤギ、ラクダなどともに飼育している。そこは人口密度が低く広大な草原を確保できるため、天然草原の通年グレンジングをもとに数百頭から多ければ一〇〇〇頭近くの群れ飼育が展開されている。基本的に肉や乳の家畜生産物に食糧資源を委ね、生活素材として毛・皮の利用も活発である。

このような地域では牧畜成立に重要な家畜の搾乳、去勢、屠殺などの技術、さらにそれらの技術と大きく関わ

る群れ管理（ハーディング）の技術を発達させている。また、そのような生業は、単に経済や技術の位相以上の、社会関係、精神世界に関わる文化の位相に対しても重要な意味をもっている（小長谷 1969）。まさに、乾燥冷涼な気候、広大な草原に適合する形で牧畜がおこなわれ、その生業に規定される生活世界が広がっていると考えると、当然そこで飼育されているヒツジなどの家畜も、その生活を維持する上で目的に応じた品種改良がおこなわれ、自然環境、社会環境に適合した品種特性を保有しているのである。

一方、湖羊は、そのような牧畜的世界とはかけ離れた自然環境、社会環境のもとで飼育され続けてきた。浙江省嘉湖地方は、「農区」の細区分である「長江中・下流農区」の東端に位置する。この「長江中・下流農区」は、西は湖北省宜昌、東は上海までの長江流域の沖積平野に広がる温暖湿润地帯である。年平均気温一五〜一八度、最寒月（一月）の平均気温でも〇度前後、最も暑い七月の平均気温は約二八度であるが、熱暑時の最高気温は四〇度を超すこともある。年間降水量は一二〇〇〜一五〇〇ミリ、無霜期間は二七〇日ほどと、高温多湿の自然環境にある。

一帯に湖沼が多く分布し、それをつなぐように河川、クリークがめぐり、ここでは水稲生産を中心とする中国有数の高生産農業がおこなわれ、養魚、内水面漁撈、養蚕などとともに「非牧畜的家畜」が農業の中に積極的に組み込まれている。特に、浙江省や江蘇省などの太湖周辺地域の複合的生業は、高度に精緻化され、複雑な生業結合形態をもっており、「魚米之郷、絲綢之府（魚と米の里、絹の府）」の美称が与えられている。

このような中国華南を中心に広がる農耕卓越地域の家畜飼育は、ブタやスイギュウなどの大型有蹄類や、ニワトリ、アヒル、ガチョウなどの家禽類の飼育が主体である。もちろん農耕用のウシは存在するが、それは畜力の利用に力点がかけられ、肉利用、乳利用は副次的なものであったのであり、あくまで「非牧畜的家畜」が、この

地域の家畜の特徴といえる。この農耕卓越地域において、「牧畜的家畜」の代表ともいえるヒツジ（湖羊）が飼育されている事実には注目しなければならない。

二 創られたヒツジたち

1 湖羊の創出の歴史

当然ながら、湖羊はもとより湖羊なのではない。すなわち、湖羊は人間から生活面、繁殖面でさまざまな干渉を受け、それにより変化させられたヒツジである。現存する他のヒツジ同様、人為的に創出された品種なのであって、自然に誕生したヒツジではないのである。

中国のヒツジは、アルガリ (*Ovis ammon*) の系統に属するとされている (ゾイナー 1983; 加茂 1973 など)。加茂儀一は、仰韶文化 (およそ BC 五〇〇〇〜三〇〇〇年) の遺跡からは、ヒツジの出土例がないとし、その登場は龍山文化 (およそ BC 二五〇〇年〜一九〇〇年) からで、この時期における西南アジアからの伝来を想定している (加茂 1973)。しかし、実際は仰韶文化の前期を代表する陝西省半坡遺跡からヒツジの下顎骨が三個出土し、またヒツジを形象したと思われる陶器が出土している。増田精一は、この段階のヒツジは野生種の可能性が高いことを述べ、加茂と同様の説を提示しているが (増田 1967)、一方、横田禎昭はこのヒツジが殷墟で発掘された殷羊 (*Ovis shangii teilhardi et young*) に類似することを評価し、仰韶文化が野生ヒツジの馴化段階であったと推定している (横田 1983)。

その後、中国の考古学的発掘が進むなか、ヒツジと同定される骨や歯、ヒツジを象徴した陶製品などが発見され、中国におけるヒツジの家畜化の存在を、新石器時代B C七〇〇〇〜六〇〇〇年まで遡らせる見解も登場している(清水・笹崎ら²⁾など)。また、中原以西から青海、チベット、四川にまたがる広大な地域で活動していたといわれる古羌族が、アルガリ系の野生ヒツジを馴化し西藏羊系のヒツジを生み出し、さらにそれと外来移入種を交配することにより、現在の多様な中国ヒツジの品種形成がおこなわれたとする見解もみられる。

しかし、中国新石器時代の遺跡、動物遺物の出土状況と分布を詳細に検討した甲元眞之は、ヒツジと従来鑑定されていた骨に、モウコガゼル (*Procapra gutturosa*) やゴール (*Naamnetides goral*)、コウジヨウセンガゼル (*Gazella subgutturosa*) など野生の有蹄類が混入している可能性を指摘し、正式にヒツジと鑑定された例が増える龍山文化期以降の骨が家畜化されたヒツジと断定できるとしている(甲元 1992)。彼はまた、龍山文化期以降のヒツジの家畜飼育は、黄河流域においては家畜の中で多数を占めることはなく、相対的に数が増加するのは長城以北の草原地帯における家畜飼育の進展を待つしかないことを示唆している。

このように中国のヒツジおよびその飼育技術の成立過程については、確たる論証が未だなされないままであるが、いずれにせよ湖羊の飼育される江南地域において、野生ヒツジが直接家畜化された可能性はかなり低いと見積もっても問題なからう。当然、湖羊は、中国における家畜ヒツジが誕生した次の段階として、自然環境、社会経済状況に応じた多様な品種・技術改良の結果登場した品種と見なすべきである。そして、湖羊成立以前、最初にヒツジ飼育を発展させた地域は中国北部、および内陸部の乾燥地帯であり、飼育技術もその環境に適合したものである。それは残された農書類からも明らかである。

中国農書の最古の部類に入る、B C一世紀に書かれた『汜勝之書』などにはヒツジ飼育に関する記載は見受けられないが、A D六世紀の『齊民要術』には、子ヒツジを確保する時期、繁殖・去勢の心得、ヒツジ飼いの適性、放牧の秘訣、ヒツジ小屋の建て方と管理方法、給餌法、搾乳法、チーズ・毛など生成物の加工法、病気の治療法など、ヒツジの飼育・利用技術が細かく記載されている。同書では、基本的にヒツジの飼育は放牧の形態をとっているが、厳冬期などには舎飼いをすすめている。ただし、「羊圈(ヒツジ小屋)は、熱気に痛められないよう「廠(あずまや)にし、乾燥を保つため小屋の中には高台を築き、溝を掘って水が停滞しないようにする。また、ヒツジは湿った土に横になると毛は汚れ、病気になるので、二日に一回掃除して、糞で汚れないようにする」という。

以上のような飼育に関する記載は、明らかに北方の乾燥地域、さらに放牧地をある程度確保できる土地利用形態に適合した管理技術、知識体系に属するものである。そしてこの北方的、高燥的、牧畜的な環境に適合した飼育技術に関する情報は、一三世紀、元代有数の農書『農桑輯要』などにも引用されていく。しかし、このような冷涼乾燥牧畜適合型の飼育技術は、湖羊の存在する江南地域においては応用が困難であり、当然、独自の飼育技術を発展させる必要があった。

湖羊の成立にあたって、その改良の基礎とされた品種については、現在の蒙古羊系統ヒツジの移入に注目する説(森 1970: 287; 李群 1987: 386-391)と、ヒツジの分布する地理的観点や形質的な近接性から、河北省や河南省に分布する小尾寒羊 (Small Tailed Han Sheep) という品種との近縁関係に注目する説(李志農 1993: 55)、蒙古羊系と寒羊系がともに移入されたとする説(蔣・何ら³⁾)とに大きく分かれる。また、湖羊の成立年代については、一二世紀以降の南宋の成立以降とする説が有力視されている(鄒 1986: 171; 李群 1987: 386-391; 李志農 1993: 55)。

これは「北羊南移」と呼ばれており、一二世紀初頭、北方系の金の南下に圧迫された北宋が南に渡り南宋を建国し、大量の黄河流域住民が、遷都した臨安(現浙江省省都杭州)など江南地域へ移り住み、その際、大量のヒツジ

を携えてきたとするものである。¹⁾

一方、安志雲・李有龍などは『十国春秋』を読み解くなから、五代十国期にヒツジの江南地方への移入が始まり、北宋期にもさらに幾度となく来入が継続され、それが湖羊の基礎となったという反論を提示している(安志雲・李有龍 1995: 102-103)。

いずれにせよ、湖羊の原品種の江南地方への到来は、南宋時代以前と考えられるが、しかし、地方誌や農書の記載の歴史的知見を渉猟すると、現在の湖羊の飼育形態と品種特性が完成されたのは、一七世紀初頭の明末清初と、時代はかなり下がることになる(菅 1998: 19-130)。つまり、特異的な飼育形態と品種特性を有する湖羊は、少なくとも約五〇〇年ほどの歳月をかけて、特異性を身につけたことになる。それ以前は、今の湖羊は存在しないのである。

湖羊の形成過程を歴史的状況のなかで考えれば、それが農耕の高度集約化や商業化の過程と並行して進行してきたことが理解される。その到来は、一二世紀中廂から一三世紀初頭の南宋代にまでは確実に遡れる。その時代長江デルタは「江浙実らば天下の食たる」、「蘇湖熟すれば天下足る」といわれたように、全国でも有数の穀倉地帯であり、その経済的基盤は食糧生産にあった。しかし、その地域は後に比類なき高度な商業的農業の卓越地帯へと変容していく。特に明代は、自給自足的な生業経済はもとより、食糧生産中心の経済も衰退し、新たな商業的農業経済が席卷するという時代であった。この地の農業の質的変容という状況にあって、人びとの商業的な高い欲求が、湖羊創出の大きな原動力となったのである。

2 ヒツジを変える生業システム

湖羊を変えた商業的農業とは、いかなる形態をとっていたのであろうか。

先にも述べたように、嘉湖地方は、一般にヒツジ飼育のおこなわれる乾燥地帯とは、明らかに異なった自然環境、社会環境を有する。この地方は歴史的にみても農耕が極度に卓越した「農区」であり、ヒツジなど「牧畜的家畜」の飼育は本来盛んではないはずである。嘉湖地方は、平原のクリーク地帯に位置する。ここでは、稲作を中心に、小麦、アブラナなどの裏作、タバコ・キクなどの花卉栽培、養蚕、養魚、ブタ・ヒツジ・ヤギ・ニワトリ・アヒルなどの家畜、家禽飼育が多角的におこなわれている。また近年、改革開放以降、二〇代〜三〇代の若者による近隣の工場への就労や、都市部への出稼ぎにより多くの現金が村へともたらされている。そのため、実収入に占める農業収入の割合は次第に低下している。

桐郷市梧桐鎮のある家族、X B 家の一九九五年の収入を例にとってみると、X B 氏、息子夫婦、孫二人の五人家族(実労働力は孫を除く三人)で、二・七畝(約一ハール)の水田から年間約二〇〇〇元、アブラナなどの裏作で約二〇〇〇元、養鶏・アヒルで約五〇〇元、養羊で約八〇〇元、そして息子の印刷工場での賃金で約四〇〇〇元と、農業収入は全体の約五七パーセントを占めるにすぎない。この家では息子が九三年に工場へ勤めに出て以降、手間と資本のかかる養豚は止めている。人びとは、限られた家庭内の労働力を、手間や収益を勘案しながら、一年中何らかの生産活動に可変的に振り分けているのである。

この地域の農業生産は、高収益を求めて労働力を複数の多角的な生業に配置するとともに、それぞれの各生業

から得られる生産物、老廃物を、他の生産を維持する上で再利用し、資源のサイクルの中に位置づけ、緊密に結合させあっている点において特徴的である。

例えば、ブタやヒツジの糞尿は、水田、桑畑の肥料として不可欠であり、桑はカイコの餌として用いられるとともに、ヒツジの飼料ともなる。また、カイコの食べ残した残滓もヒツジの餌となる。繭をとった後のカイコは、ユイタン（魚塘、養魚池）に入れられ魚の餌となり、それを食べた魚の糞泥は桑、花卉類の畑、竹林の肥料として使用される。

このような結合は限られた土地を有効に利用するための方策として考えられており、結合する空間や資源の利用系は意図的に人びとによって構成されている。そのため、村内の土地は、道路、家屋地、耕作地、養魚池、そして村の中を縦横無尽に貫くクリーク（水網）などによってそのほとんどが利用され、未利用の荒蕪地は、一般農村において五パーセントにも満たない。

馬孝勅によると、太湖周辺地域は、古くから開発された伝統的農業の精粹が凝縮して存在する地域で、明・清代には、すでに農業、牧畜、養魚の有機的結合が達成され、合理的生産構造と効率のよい生態システムが形成されていたという（馬 1986: 487-534）。馬は農書および地方誌に依拠して、この地の生業結合システムを「糧食油料作物・蚕桑・竹・果樹・牧羊・養魚の生態システム」と「農業・養蚕・牧畜・養魚の生態システム」に分類している。

まず、「糧食油料作物・蚕桑・竹・果樹・牧羊・養魚の生態システム」は、清代初頭の農学者張履祥が記した「策鄔氏生業」なる史料から抽出されたもので、明、清代の桐郷地方において、小農経営による労働力不足、拡大不可能な耕地という条件下で構築された資源の有効利用体系と考えられる。そこでは労働力、耕地の不足に悩むこ

の地の多角的農業経営を目指し、ヒツジも当然ながらその生産システムに組み込まれているのである。

次いで「農業・養蚕・牧畜・養魚の生態システム」は、明末の沈氏の『農書』から抽出される。それは、一、農業の副産物でブタを飼いブタの糞で耕地を肥やす方式、二、桑葉でヒツジを養い、ヒツジの糞を桑の肥料にする方式、三、タニシ、水草、畜糞で魚を養い、魚糞で耕地を肥やす方式の三つの農牧互養と生態循環のタイプに分けられる。この三タイプが結合し、農桑牧魚結合の全体循環系を構成しているのである。

明末清初に確認できる、太湖周辺地域における高度な合理的、集約的生産構造は、この地域の農業が強く商業化される過程で獲得されたものであり、以後現在まで連続と継承されている。さらに、その過程は湖羊を生み出す過程でもあった。湖羊改変の年月は、中国江南地方の商業的農業の発展期と軌を一にするといっても過言ではなく、湖羊は、商品動物としてこの時期に強度の品種改良を施されたのである。

3 商品としての湖羊

湖羊は、まさしく商品である。それは、売買されることによって、生産者に利益をもたらす。

湖羊飼育において、一般の牧畜社会で重要視される乳、成体の毛（羊毛）は、ほとんど生業経済や商品経済上の意味をもっていない。資源を有効に使うことに巧みなこの地方の人びとが、ヒツジの乳利用をおこなわないのは、あくまでヒツジ乳の食利用という嗜好面、文化面の問題から理解するしかない。

後述するように、出産後かなり早い段階で子ヒツジを売却処分するので、残された繁殖メスから遠慮なく乳を確保できる状況にあるが、そのような発想と技術を、この地の人びとはもち合わせていないのである。また、羊

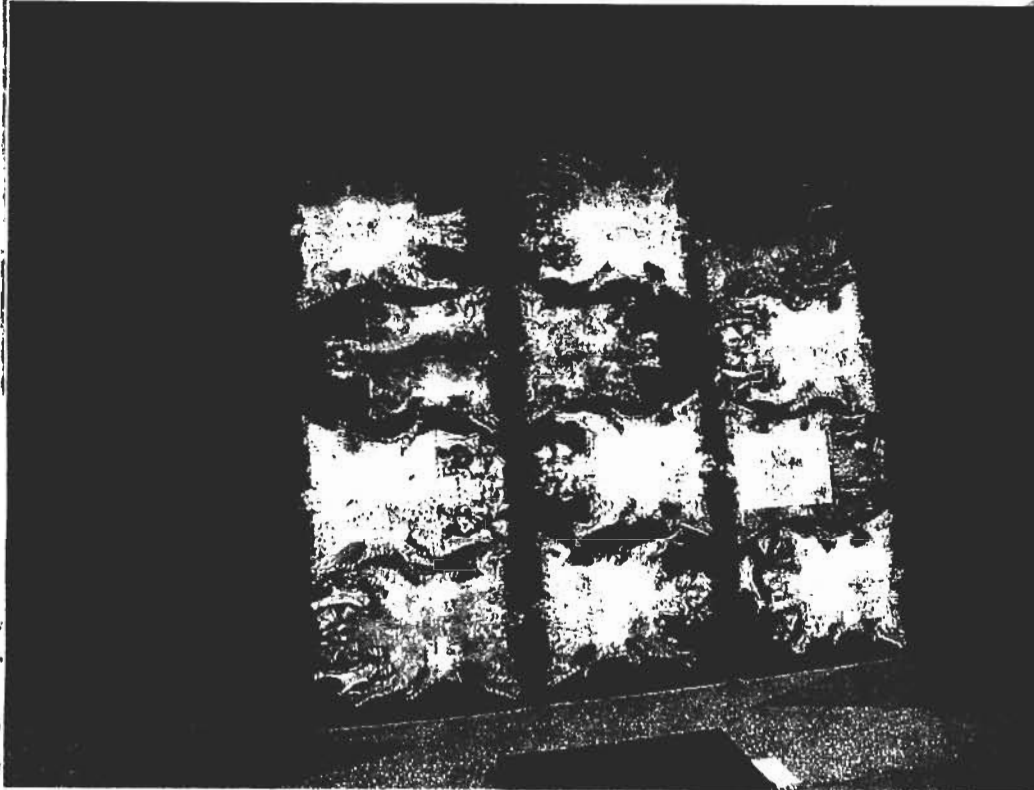


写真 4-2 シャオフーヤンピ（湖羊の子ヒツジの皮）の乾燥



写真 4-1 シャオフーヤン（子ヒツジ）の売買

毛については、かつて自家で紡ぎ、衣類を編むこともあったがあまり盛んではなく、現在ではまったくといってよいほど利用されていない。それは、飼育単位（世帯）あたりの飼育頭数が少なく、とる毛量も少ないという理由、また常に湿った糞泥がその体表に付着し、羊毛の質があまりよくない上に、それを洗浄して刈り取る手間がかかるという理由で説明されている。

湖羊は、ブタと同じく糞尿が肥料として利用されるが、その飼育目的において最も重要視されるのは、皮革および肉として換金するための子ヒツジである。成ヒツジもまた、皮革および肉として売却されるが、これは、子ヒツジ生産に付随するバイプロダクトとしか見なされておらず、それが目的化されることはなく、事実、成ヒツジ売却益は、子ヒツジの売却益より遙かに少ない。湖羊飼育において、子ヒツジの売買によって得られる金銭が収益として、最も重要視されているのである。

このような飼育目的から、このヒツジ飼育が生業経済ではなく、商品経済と不可分であることが理解できる。そして、その商品経済の影響は、近年もたらされたものではなく、湖羊という品種の完成期である明末清初には、

すでに無視できぬほどの影響力をもっていたのである。

湖羊の毛皮は、「ルアンパオシ(軟宝石、柔らかい宝石)」とも称され、古くより移出商品として珍重されてきた。特にフーヤンコウピ(湖羊羔皮)の名で知られる子ヒツジの皮は、最も商品価値が高い。ただし、湖羊を飼育する農民は、直接、この皮生産に関わるわけではなく、皮革の原材料である子ヒツジを供給する役割を担っているのみで、実際の皮革加工は町場の皮革生産の専門業者がおこなう。つまり、子ヒツジ生産と、子ヒツジの皮革生産は分業されているのである。

生後三日以内の子ヒツジはシャオフーヤン(小湖羊)と呼ばれ、現在、最も頻繁に取り引きされている。それから得られた皮はシャオフーヤンピ(小湖羊皮、子湖羊の皮)と呼ばれ、光沢、紋様に富み、婦人服や帽子、襟・袖・肩回りなど服飾品の部分素材として用いられる。その紋様などによって値段に幅があるが、一九九二年時点一頭あたり一五元(四〇元(二元約一五日本円))で取り引きされていた。生まれた子ヒツジをシャオフーヤンピとして利用する場合、生後三日以内に売ってしまう(屠殺してしまう)が、それまでのあいだシャオフーヤンの段階では母ヒツジから授乳させない。乳を与えると紋様が粗雑になり、値段が下がるという。

農民と皮革生産者の売買において、その交渉の規範となっている情報は、皮革生産者と皮革買いつけ人のあいだで取り交わされている基準である。この基準にしたがってシャオフーヤンピの等級がつけられ、価格が決まる。等級づけは、皮自体の状況(傷の有無、変色、虫食い等)、皮についている毛の状況(毛の長さ、密度、硬さ、細さ)、毛が集まって規則正しい柄を示す紋様の状況(紋様の種類、皮全体に占める紋様の面積、紋様の大きさ、紋様の平均度、紋様の鮮明度)の三点からおこなわれる。これらの評価項目は、皮革生産者がフーヤンコウピを皮市場で売る際の基準としてあるのみならず、湖羊の売買段階を経て農民のあいだにも共通に浸透し、さらに農民の湖羊の繁

殖形態にも影響を与えている。湖羊生産は、あくまで商業経済と不可分な生業なのである。

三 湖羊を創出した技術

1 ブタと一緒に閉じこめられた湖羊——完全な舎飼いとフィーディング

以上述べてきたような、この地の高度な集約的、商業的農業経営は、湖羊に特異的な飼育管理を強いてきた。先にも述べたように、この農業地域は、経済の高度集約性を生み出す生業結合によって、空間は全面的に効率よく利用され、そこに余剰地はほとんど存在しない。したがって、ヒツジを放牧する土地は皆無であり、そのためヒツジはブタと一緒に屋内で飼育されている。

湖羊飼育の最大の特徴は、この完全舎飼いという特殊な飼育法に見出すことができる。

湖羊が外に出るのは死んだときか、売買、貸借されるときか、屠殺されるときかのいずれかで、終生ほとんど、あるいは一步も外に出ることなしに、その一生はまつとうされる。このような完全舎飼いは、通常の伝統的なヒツジ牧畜例と比較するとかなり異様である。もちろん、冬場の厳寒期に限定的な個人舎飼いがおこなわれる地域は、西アジアやヨーロッパにも存在するが、完全な通年の舎飼いは伝統的ヒツジ飼育においてほとんど例を見ないであろう。

湖羊は、家の奥の窓もない暗黒のカンカー(坑間、物置兼家畜小屋、便所)の中に、ブタと一緒に入れられてい



写真 4-4 湖羊とヤンバン



写真 4-3 嘉湖地方の住居 (手前の平屋がカンカー)

る。

カンカーの中には奥行き約二メートル、幅二・二・五メートルの四角に柵で仕切られたヒツジ小屋ヤンバン(羊柵)、ブタを飼うツーバン(猪柵)、肥料用の人糞尿を貯める便所モーカーン(茅坑)に区切られている。ヤンバン一囲いは、わずか約四、五平方メートルの面積しかないが、この狭隘な空間に冷涼な冬場では五、六頭、熱暑の夏場でも四頭ものヒツジが詰め込まれている。保有頭数が多い場合、飼育空間の一頭あたりの面積は、一平方メートルにも満たず、湖羊飼育の過密性は際立っている。ブタを飼育するツーバンもヤンバンと同じぐらいの広さで、通常、そこで二、三頭のブタがヒツジと隣りあって飼育されている。一頭あたりの面積は湖羊に比べ多く見積もられるが、その体軀の大きさからいって飼育における過密性は、ブタもヒツジと同じである。湖羊は基本的にブタと同じ環境で飼育されているといえる。

ただし、ブタと湖羊の飼育はまったく同じではない。それぞれの習性を加味して、飼育方法に違いがあり、そ

これはヤンバンとツーバンの構造の違いにあらわれている。

ツーバンは三方がレンガで仕切られ、前方が割り竹で完全に塞がれているが、ヤンバンに関しては前面のみがあいだの空いた柵になって湖羊が顔を外に出せるようになっていた。これは餌の質、そして給餌する方法の違いによるものである。ブタには人の残飯の他、米糠、サツマイモ（芋蔓も）、ダイズかすなどを水に溶き、ツーバンの中にある給餌槽に直接入れる。しかし、ヒツジの飼料は草であり、これを柵の外側において、湖羊は柵越しに頭を出して食べる。ヤンバンの中に直接餌を入れないのは、湖羊は草に糞尿がかかると、その草を採食しなくなるためである。

また、ツーバンの床はレンガ敷きでその上に敷き藁等はないが、ヤンバンの床には敷き藁が深く敷きつめられており、敷き藁を頻繁に取り替えることよってある程度の乾燥を保つことができる。しかし、これもツーバンに対する相対的な乾きであり、草原における飼育環境と比べると明らかに湿度が高く、本来純白であるその体軀はいつも黒く汚れている。

このようなブタ同様の舎飼いの利点について人びとは、一、余剰の土地が乏しいこの地方にあつて利用する空間が少なく済む点、二、カンカーには窓もなく、また各家ごとに隔離されているためハエやカの害虫や伝染性の病気を回避できる点、三、ヒツジの運動量を減らすことができ、餌を効率よく施すことができる点、四、肥料用の糞尿を効率よく集められる点から説明する。

本来、山野を駆けめぐる牧畜的家畜を、ブタと同様の環境で飼育することに少々無理を感じるが、この嘉湖地方の人びとにとっては社会環境、自然環境に適合した方法として受け止められ、かつ現実にこの方法で数百年もその長きにわたって湖羊飼育を持続してきた歴史的事実には注目せねばならない。

湖羊を舎飼いすることは、すなわち狭い空間において強制的に過密飼育することを意味する。したがってここでは群居性、追従性といったヒツジの本来的な習性に則った群れ管理技術は、ほとんど発展しなかつたし、また発展する必要もなかつたのである。その代わり、飼料を人間側が毎日欠かさず供給する、いわゆるフィードイングという飼養形態を発達させる必要がある。これは、近隣に自生する雑草と、養蚕と結合した桑の葉を家内労働力で徹底利用することにより可能となっている。ところが高度に農耕地を集約化しているこの地では、一般に飼料となる草の量は限定的であり、またそれを確保するための人手も限定的である。すなわち、獲得できる飼料資源量と労働量が各家の湖羊の数をある程度限定している。保有頭数は各家まちまちで、多くて八頭から一〇頭前後と見積もられており、それ以上の湖羊の飼育は、個人的な小規模経営による飼育形態において飼料上不可能と考えられている。

2 極端な近親交配——オスの早期更新とライン・ブリーディング

以上のように飼育頭数は、各家の獲得できる飼料資源量と労働量によって変わってくるが、ただし、一軒で保有される一ユニットの性別、年齢別構成には、一つの傾向性を見出すことができる。

通常、湖羊の成オスは、繁殖用の種オスが「一頭しか保有されない」⁵⁾。ただし、その種オスの次代を担う種オス候補が、ともに飼育されている。そして、その種オスの交替は、毎年おこなわれる。

この地方には、「猪過期死勿及、羊過期大勿及」(ブタは死んでからでは間に合わない、ヒツジは大きくなってからでは間に合わない)ということわざがある。これは、ブタは死んで売れず、ヒツジは大きくなっては売れない。し

たがって、ブタは死ぬ前に処分し、ヒツジは大きく成長する前に処分しなければならないという意味である。このことわざは、売買を前提とした湖羊飼育におけるオス早期更新の重要性を端的に言いあらわしている。

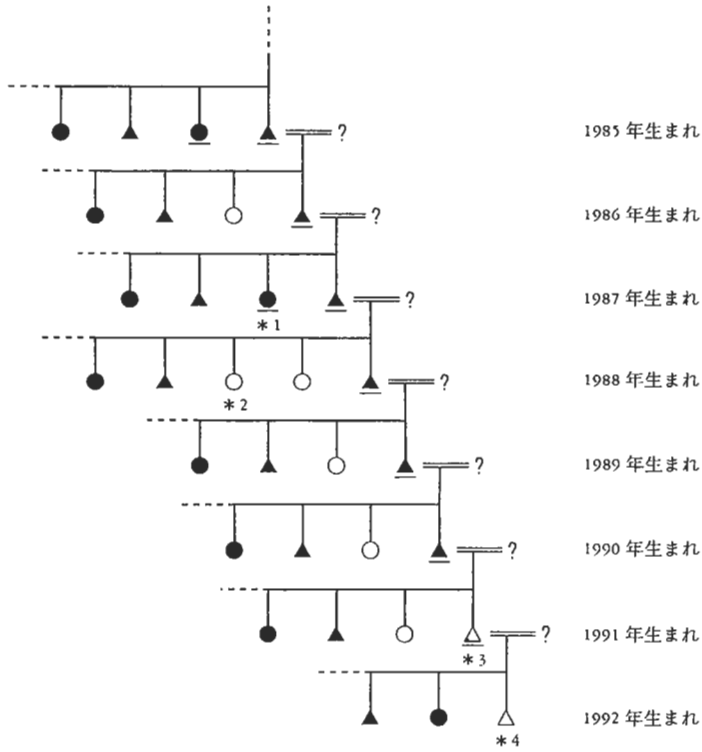
湖羊飼育において、種オスを長期飼育することは不利なことと受け止められている。なぜならば、オスヒツジは、種つけには用いられるが、換金される収益としての産物を直接には生み出さないからである。さらに、一年を過ぎて大きくなった成オスは、肉質が低下しているものと見なされ、経済価値は低くなっていく。また、食餌量が増えるので、その維持コストは大きくなる。種オスは、このように経済に直接寄与しないため、およそ生後一二月〜一五カ月齢というかなり早い時期に、若いオスと交替させられ、屠殺される。

一方、繁殖用のメスは、オスとは対照的に早期には処分されず、特に産子数の多い繁殖用メスは積極的に長く飼育される。

牧畜社会において、家畜は元金のごとく扱われ、生産される乳を利子として利用することにより持続的な生活を営んできたが、この地域では生産される子ども自体を利子として利用するのであって、それを直接生み出すメスは貴重な元金なのである。そのため基本的に、飼育頭数に応じて更新の年月が決まってくる。年をとると産子数が減少するので、理念的には毎年、年取ったものから順に一頭ずつ、新しいメスと更新していく。したがって、例えば、繁殖メスを六頭飼う家では六年で更新、三頭しか飼育しない家では三年で更新するのである。そのため、繁殖メスと一緒に、種オス同様、交替用の候補が飼育されている。

さて、以上のような繁殖形態を執りおこなうと、一戸あたりせいぜい数頭という飼育頭数からいって、必然的に特異的な交配法となってしまう。つまり、極端な近親交配となってしまうのである。その構成と系譜は図

桐郷市石門鎮のある農家、LY家の一九九二年九月時点の飼育ヒツジを例にみてみよう。その構成と系譜は図



△…種オス、▲…更新された種オス、△…種オス候補、○…繁殖メス、●…更新されたメス、▲…売却されたオス子ヒツジ、●…売却されたメス子ヒツジ *1 繁殖メス1年目で病死、*2 *1の死にともなう繁殖メスの補充、*3 母は1986年生まれの繁殖メス、*4 母は1989年生まれの繁殖メス

図4-2 1992年9月のLY家が飼育する湖羊の構成と世代・血縁関係

4-2のようになるが、これをみると極端に近親交配の度合いが高まっていることが理解できる。

種オス一頭、繁殖メス六頭、種オス候補一頭の計八頭は、すべて父系的につながる複雑なライン・ブリーディングで繁殖されている。一九八七年生まれの繁殖メスが本来存在するはずであるが病死したため、翌年、一頭余分に補充されている。この例を除けば、LY家の繁殖メスは毎年一頭ずつ更新されている。例えば、一九八五年生まれの

繁殖メスは、一九九一年生まれのメスに更新されている。また、一九九二年時点、まだ繁殖メス候補が選択されていないが、それが選ばれるとすぐに一九八六年生まれの繁殖メスは更新されることになる。

この地において、種オスを恒常的に飼育する家では、ヒツジの系譜は父方で把握できる。毎年、父から息子へと種オスは継承されているのであるから、途中で断絶されない限り、生まれた年さえ覚えていけば、父を辿ってその系譜を確認することは可能である。しかし、ことさらどの種オスが父であったかなど覚えていないものではない。

また、母に関する情報は、更新が複数年にわたるため、さらに明確ではない。LY氏が、自分の飼育するヒツジの内、母を明確に記憶し把握しているのは、生まれてさほど年月の経っていない種オス（一九九一年生まれ）と、種オス候補（一九九二年生まれ）のみである。種オスの母は、一九八六年生まれの繁殖メス、種オス候補の母は、一九八九年生まれの繁殖メスである。種オスと種オス候補にとって、それぞれの母は父系を辿った近縁のヒツジでもある。しかし、父系によって系譜に位置づけることは可能であるが、そのような系譜を意識して交配させることはなく、意識化されない濃密な、閉じた近親交配系のみが存在する。

一九九一年生まれの種オスは、この時点で自分の妹（一九九一年生まれ）、父の姉妹（一九九〇年生まれ）、さらに上の世代のオスたちの姉妹（一九八九年生まれ、一九八八年生まれ、一九八六年生まれ）母でもある）と交配されるといふ複雑さをもつ。その交配の近親性は、母方の系譜関係を考慮に入れると、想像以上に高まる。

このような閉じた近親交配を障害として意識していない点は、この地の伝統的ヒツジ飼育の特徴といえるであろう。複数の種オスと、多くの繁殖メスを有する大方の牧畜民ですら、飼育する家畜の系譜をある程度は意識し、極端な近親相姦を避ける傾向があるにもかかわらず、限定少数しか飼育しないこの地には、系譜意識すらないのである。

湖羊の近親交配は、少ない頭数を自家で完結的に飼育すれば当然起こりうる問題である。しかし、その問題が数百年ものあいだ、湖羊飼育を継続させる上で、直接問題とならなかった（と、認識されている）ことに注目すべきであろう。

近親交配は遺伝子型がホモ化し、よい形質を固定化させる場合には望ましいが、まったく望ましくない劣性遺伝がホモとなって表型に出てくるおそれもある。一般に、近親交配を繰り返すと、生存力に劣化が起き、飼料利用の低下、発育不良、矮小化、繁殖率低下、泌乳機能の低下などの近交退化がみられる場合が多い。しかし、そのような湖羊飼育を維持するのに大きな障害となる近交退化は、今のところ発見されていないのである（蔣・何 1985: 151）。

実際には、偶発的な種オスの死などで、新しい血が流入する可能性がある。また、生まれてきた子ヒツジの大部分は、生後三日以内に屠殺されることから、矮小化、発育不良、泌乳機能の低下などは直接の問題とはなりにくくなっている。近親交配は、そのような害さえなければ、品種を改良したり、あるいは特定の品種特性を固定したりすることに寄与したと考えられる。

オスの世代更新の早さや近親交配といった特異的な繁殖形態は、湖羊が他のヒツジ品種に比してもつ特異的な品種特性の創出に、少なからず影響を与えたようである。

四 「あるべき生き物」としての湖羊

1 湖羊の特異的な品種特性——早熟性、通年繁殖性、多胎性

嘉湖地方の人びとは湖羊に対し、自分たちの祖先が長い年月をかけて作りあげてきた品種として誇りを持ち、その優秀性を自慢する。彼らに把握されているヒツジとしての優秀な湖羊の品種特性は、第一に早熟性、第二に通年繁殖性、第三に多胎性である。

湖羊の第一の特異的な品種特性は、そのあまりにも早い性成熟——早熟性——に求められる。正確にいうと、早熟性を利用して、早期交配される点が特徴である。

一般の牧畜社会におけるヒツジには、早期の交配はほとんどみられない。例えば、かつての伝統的モンゴル遊牧民では通常、ヤギやヒツジはゾサグと呼ばれる数え三歳の春に産し、それより早く産するものは子嫌い現象を招くため問題視されていた(小長谷 1969)。子嫌い現象とは、産した乳児の介護を親がおこなわないことであり、その現象が起こると、幼児の成長の大きな障害となる。その現象を引き起こす要因となる若年期の産は、モンゴル遊牧民において避けられてきた。

ところが、一方、湖羊はオス・メスともにふつう生後四〜五カ月ほどで性成熟し、中には生後三カ月齢で発情する個体もあるという。そして、それらは早くも六カ月齢には実際の繁殖に供されるのである。

家畜は古くより早熟の方向へ改良が進められてきたため、一般に在来種より家畜の改良種のほうが早熟性は高まる傾向があり、この点からいうと湖羊の改良の度合いが推し量られよう。ただ、ここで重要なのは、早熟という品種特性とともに、その早熟性をネガティブなこととせず、むしろ早く子どもを得ることができる有利な特性と見なしていることである。

遊牧社会で重視される大規模群れ飼育や、子ヒツジの長期育成を考えると、早熟性は問題になるかもしれない。しかし、湖羊は舍飼いされるのであり、かつ種オス・繁殖メス候補以外の子ヒツジの育成をおこなわないため、早熟性はまったく問題視されない。それどころか、利益を生む子ヒツジを短いサイクルで確保させてくれる有利な特質となっているのである。

湖羊の第二の特異的な品種特性は、繁殖期が限定されない性質——通年繁殖性——に求められる。一般的な牧畜社会のヒツジにおいて、メスは通常、短日期に発情して季節繁殖をおこなう。つまり、日照時間の消長によってメスの発情期の出現と、その長さに影響を与えるのであって、基本的に日が短くなった秋口から初冬にかけてしか、ヒツジのメスは発情しない。熱帯や低緯度地帯において、周年繁殖は確認されている(Harfe 1968, 245)が、中緯度地域では通年で繁殖する品種はほとんどいない。ところが、非妊娠の湖羊のメスは日照時間の消長とは関係なく、一年中、発情するという通年繁殖性を有しているのである。そして、湖羊は、通年繁殖性をもつことによって、一年に二回、あるいは二年に三回という連産を可能にしている。この性質は早熟性ととも、子ヒツジを回転よく生産することに寄与している。

湖羊の第三の特異的な品種特性は、産子数の多さ——多胎性——に求められる。

ヒツジは、一般に品種によりその産子数にばらつきがあるが、伝統的牧畜社会あつては、多胎出産はそれほど

小尾寒羊 (Small Tailed Han Sheep) や大尾寒羊 (Large Tailed Han Sheep) などとも類似した品種特性を有する。しかし、その品種特性を最も強く表出し、農業の論理を顕著に表出するのが、湖羊なのである。

2 「あるべき生き物」としての湖羊

中国江南に飼育される湖羊の特徴的な利用目的、飼育技術、繁殖形態、品種特性についてみてきた。

湖羊は、高度に集約化された商業的農業の卓越する地域で、数百年もの長きにわたって商品としての子ヒツジを生産するために飼育されてきた。そのため、他の経済活動と競合しないように、完全舎飼いという特殊な飼育管理方法が適応されている。さらに、狭隘暗陰な小屋に閉じこめられた湖羊は、その内部において濃密な近親交配を繰り返してきた。このような特異的な飼育の結果、湖羊は、早熟性、通年繁殖性、多胎性という、牧畜世界の一般のヒツジにはみることのできない、特異的な品種特性を身につけることとなった。その特性は、このヒツジを育て続けた人びとの考え方、欲求、価値観が投影されたものである。

人びとには、商品として金銭をもたらす子ヒツジを、できうる限り多く獲得したいという欲求がある。その欲求を満たすため、限定的な条件(空間面積、資源量、労働量)のもと、可能な限り高生産をもたらし、徹底してコストを低減させる技術を追求してきた。そこで展開された創意工夫は、単に生産する技術だけではなく、生産する対象物―湖羊―の性質までも変えてしまうものであった。そこには徹底した人間中心的な価値観と、人間側から企図が先行した一方向的な技術適応があるのであって、牧畜の世界でみることができ、ヒツジ自身に内在的価値を発見する価値観や、ヒツジの本来的な習性に基づく双方向的技術適応はみられない。人間とヒツジのあい

だにおける、支配―被支配の関係性は明瞭なのである。

湖羊は、その存在する江南地域において、飼育する人びとによって、過剰とも思われる人為的な介入を受けてきた。湖羊は、「あるがままの生き物」として自然の成り行きで変化してきたのではなく、あたかも、人の手によって作りあげられ、完成される「あるべき生き物」のように、その特性が改変されてきたのである。そこにみられる、積極的人為は、望ましいものとして理解され、管理は徹底されている。

このような人間中心的な価値観と技術適応に、近代科学を基礎としたバイオ・テクノロジーやアニマル・インダストリーと類似した志向性を読み取ることができ、かもしれない。その結果、極端に人為を肯定するその技術と知識の体系は、動物を身近なところで育ててきた伝統社会に存在するエスノ・サイエンスとは、一見、異質なものである。それは、紛れもなく、中国の長い歴史のなかで形成された在地の独自の民俗技術・知識を応用して生み出した動物なのである。湖羊飼育には、人間による「自然」への積極的干渉、介入を肯定し、支配し、管理することがむしろ望ましいとする自然観に裏付けられた中国のエスノ・サイエンスが表出していると考えられるべきなのである。

註

(1) 中国におけるヒツジ飼養頭数は、一九四九年二六二万頭であったものが一九八八年には一億一〇五七万頭と、この四〇年の内に三倍強も増加した。

(2) 湖羊と、寒羊の系統の小尾寒羊や大尾寒羊は、ともに「農区」で飼育されてきたヒツジで形質的に近い。しかし、それが遺伝的な系統のつながりを示すものなのか、類似した社会環境の影響を示すものなのか明確ではない。

- (3) 李群によると、現在の蒙古羊系(中国の研究は安易に蒙古羊と使っているが、当然現在の蒙古羊も、長い年月のなかで変化してきたと考えられるのであって、前提としてこの語を用いるべきではない)に連なるヒツジは、紀元前より中原一帯に導入されていたとする。しかし、西晋末年の第一次人口南遷時には揚州や徐州への移動が中心であったこと、また文献・発掘資料などの状況からみて、この際に、湖羊の基礎となるヒツジが来入したとは考えにくいとする。その後、隋唐代、北宋代を経て南方への拡散の可能性は否定しないものの、人口の大規模移動がこの時期に発生していないことから、湖羊の基礎となったヒツジの来入を南宋の第二次人口南遷期とする見解をとっている(李群 1987: 381-386)。
- (4) 西アジア・アフガニスタンのパシュトゥン遊牧民などで飼育されている、カラクル種のオス子ヒツジも湖羊と同じく、生後、ごく少数の種オス候補を除いてすぐに屠殺され、その皮はアストラカンの帽子の原料となり、高値で取り引きされる(松井 1989: 53)。生後間もない屠殺とその皮の利用という観点からみれば、それは湖羊と極めて類似しているが、カラクル種の場合、あくまで群れ管理技術の一環としておこなわれているのであって、そこで生産される子ヒツジの皮は副次的な生産物と見なしたほうがよい。
- (5) 例えば、パシュトゥン遊牧民では、種オスと成メスの比として一対一〇〇が理想型とされており(松井 1989: 53)、またイタリヤ中部山村の移牧ヒツジ群は種オス一頭に対し成メス五〇〜六〇頭の比になっている(谷 1979: 26)。そのようなオス・メス比を構成させるために、これらの地では子ヒツジ段階におけるオスの大規模屠殺がおこなわれている。
- (6) 湖羊飼育農家の中には、種オスを保有しない家もある。種オスを保有していない家は、保有している親類などの家へ、種つけさせる繁殖メスとともに数日分の飼料と、若干の菓子など贈答品を持参し、種つけを頼む。しかし、種オスを飼育することに手間がかかることを考えれば、気軽に、そして頻繁に頼めるものではなく、身近に種オスのない家では、専門に種つけを職業としてやっている人に頼むしかない。その際、一回の種つけ料は一頭あたり三五元である。この金額は、生まれたシャオフーヤンのおおよそ一頭分に相当し、これを高いと思う人、あるいは安易に頼むことを気兼ねする人は自分で種オスを保有しなければならぬ。
- (7) 産子率とは、一〇〇頭のメスが妊娠したとして、産まれる子どもの数の比率である。つまり、出産においてアクシデントがないと仮定すると、すべての母メスがそれぞれ一頭出産した場合、産子率は一〇〇パーセントということになる。また、例えば、双子が二組出産されたとすれば、その産子率は一一三パーセントとなる。

引用文献

- 安志登・李有龍(1995)「關於湖羊飼養歷史的查証」『中国農史』一四(一)、農業出版社、南京。
- Dahl, G. & Hjort, A. (1976) *Having Herds*, Stockholm: University of Stockholm.
- ハーンフェツ、E. S. O. (1968)『家畜・家禽繁殖学』、養賢堂。
- 蔣兆光・何錫昌(1985)『湖羊』、農業出版社、北京。
- 加茂穰一(1973)『家畜文化史』、法政大学出版局。
- 小長谷有紀(1996)『モンゴル草原の生活世界』、朝日新聞社。
- 甲元眞之(1992)「長江と黄河」国立歴史民俗博物館研究報告三〇、国立歴史民俗博物館。
- 李群(1987)「湖羊の来源和歴史研究」『農業考古』一九八七年第一期、農業出版社、南昌。
- 李志農(1993)『中国養羊学』、農業出版社、北京。
- 増田精一(1967)「中国家羊に関する二、三の問題」『考古学雑誌』五二—三。
- 松井健(1980)「パシュトゥン遊牧民の牧畜生活」『京都大学人文科学研究所調査報告』三三、京都大学人文科学研究所。
- 馬孝劬(1986)「中国古代の農牧結合のすぐれた伝統」『中国農業の伝統と現代』農山漁村文化協会。
- 森彰(1970)「図説羊の品種」、養賢堂。
- 笹崎龍雄・清水英之助(1984)『中国の畜産』、養賢堂。
- 沈長江(1989)『中国畜牧地理』、農業出版社、北京。
- 菅豊(1998)「閉じこめられたヒツジたち」『東洋文化研究所紀要』一三五、東京大学東洋文化研究所。
- 谷泰(1976)『牧畜文化考』『人文學報』、京都大学人文科学研究所。
- 梅棹忠夫(1976)『狩猟と遊牧の世界』、講談社。
- 横田禎昭(1983)『中国古代の東西文化交流』、雄山閣出版。
- 鄭不留(1987)『中国畜産品種とその生態特徴(六)』『畜産の研究』四—一五、養賢堂。
- ゾイナー、P. H. (1983)『家畜の歴史』、法政大学出版局。
- 鄭介正(1986)『我国古代養羊技術成就史略』『中国畜牧史料集』、科学出版社、北京。

編著者 寺 嶋 秀 明
篠 原 徹
発行者 佐 藤 文 隆
発行所 京都大学学術出版会
京都市左京区吉田河原町15-9
京大会館内(606-8305)
電 話 075-761-6182
F A X 075-761-6190
振 替 01000-8-64677
<http://www.kyoto-up.gr.jp/>
印刷・製本 株式会社クイックス

執筆者紹介

秋道 智彌 (あきみち ともや) 第3章

1946年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了，理学博士。
現職 総合地球環境学研究所教授。
関心分野 野生生物と地域社会の歴史的重層関係，共有資源管理の生歴史。
著書 『なわばりの文化史』，小学館，1999年。

篠原 徹 (しのはら とおる) 論文解題

1945年生まれ。京都大学理学部および文学部卒業，博士(文学)。
現職 国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授。
関心分野 人と自然の関係に関する民俗学的研究。
著書 『海と山の民俗自然誌』(吉川弘文館，1995年)。

菅 豊 (すが ゆたか) 第4章

1963年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退，博士(文学)。
現職 東京大学東洋文化研究所助教授。
関心分野 民族動物学，人獣交渉史。
著書 『修験がつくる民俗史』，吉川弘文館，2000年。

寺嶋 秀明 (てらしま ひであき) 序，第1章

1951年生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了，理学博士。
現職 神戸学院大学人文学部教授。
関心分野 人と自然との関係，社会生活と平等主義。
著書 『共生の森』，東京大学出版会，1997年。

堀 狼星 (はなわ ろうせい) 第2章

1963年生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了，理学修士。
現職 同志社大学嘱託講師。
関心分野 ドメスティケーション論，フロンティア社会論。
著書 『続自然社会の人類学』田中二郎・掛谷誠・市川光雄・太田至(編)，アカデミア出版会，1996年。

南真 木人 (みなみ まきと) 第5章

1961年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退，学術修士。
現職 国立民族学博物館民族社会研究部助手。
関心分野 ネパール民族誌，在留ネパール人研究。
著書 『「開発」から生まれる文化』，田村克己(編)『文化の生産』，ドメス出版，1999年。

山田 孝子 (やまだ たかこ) 第6章

1948年生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了，理学博士。
現職 京都大学総合人間学部教授。
関心分野 シャマニズム，世界観の比較研究，シベリアにおける文化復興。
著書 *The World View of the Ainu: Nature and Cosmos Reading from Language*, Kegan Paul, 2001.